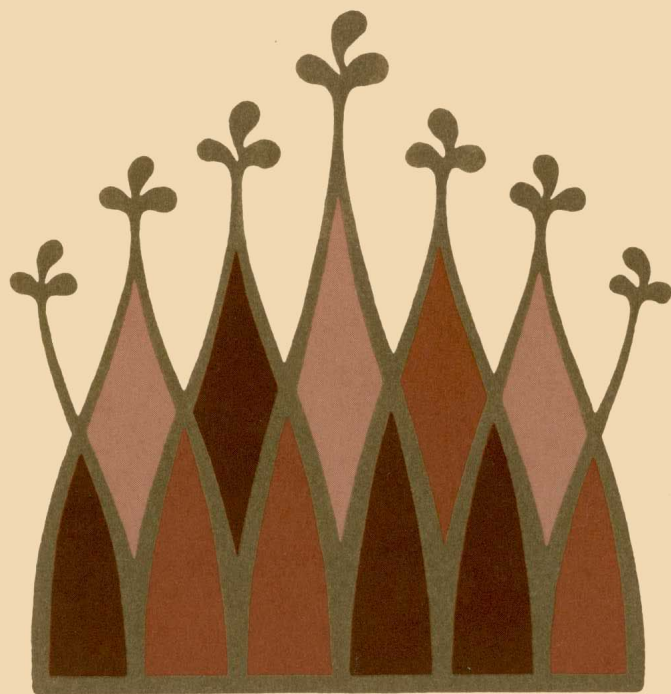


チェコスロバキアの 民話

大竹國弘 訳編



恒
文
社
版

チェコスロバキアの民話

大竹國弘 訳編

おおたけくにひろ

■大竹国弘■

1941年 新潟県に生まれる

1966年 早稲田大学文学部卒業

1973年 チェコスロバキアのカレル大学哲学部
チェコ文学科卒業

訳 書 『撃墜——ナチの手からのがれて』
(恒文社), 他



©1980

チェコスロバキアの民話

定価 2,000円

1980年7月20日 第1版第1刷発行

訳 編 大 竹 国 弘

発行者 池 田 恒 雄

発行所 株式会社 恒 文 社

東京都千代田区神田錦町3-3

〒101 電話 291-7901

振替口座 東京5-35824

落丁本・乱丁本はお
取り替えいたします

印刷・鈴木整版 製本・飯塚製本
0098-005024-2273

■ 目

次

——
チェコスロバキアの民話

賢いプリンセス 7

金色の孔雀 18

おバカさんは誰？ 24

農婦とホンザ 29

火の鳥と狐 33

オテサーネク 56

三人の糸紡ぎ 64

河童 74

二人の王子 79

フシエビエダ爺さんの金髪 82

三つのレモン 98

森の少女 115

四人の兄弟 126

三人の妖精 135

十二の首をもつ龍 141

泉の伝説 151

リンゴの乙女	154
双子の王子 ^{ふたご}	164
ブドリーネク	176
羊飼いと龍	182
ヤンコと牝馬	191
職人と悪魔	197
老犬と狼	201
強情な仔山羊たち	205
みなし子と天使	207
失われた息子	213
塩と黄金	223
手職は身を助く	236
山羊	240
時の氏神	244
プリンス・バヤヤ	250
牡猫と雄鶏と大鎌	267

カレルの湖 277

シュパリーチエク 281

ララーシュ 288

△知恵▽と△幸福▽ 294

魔法の小鍋 301

臭猫大王 305

ズラトブラースカ 309

四つの風 324

雪の少女 332

鳥 338

三人の従者 344

生命の水 361

あとがき——大竹國弘 377

チ
エ
コ
ス
ロ
バ
キ
ア
の
民
話

装
幀
・
本
田

進

賢いプリンセス

二人の若い職人が世界を彷徨していた。

ある日、二人が立派な城を通りかかると、美しい乙女が庭を散歩している。二人は柵に寄って乙女を見つめていた。

「ボジェク、おれが今何を考えているか、わかるかい？」男らしい表情の仲間が聞いた。

「多分、この城の主になりたいと思っているんだろ、ちがうかい？」ボジェクは答えた。

「いや、そうじゃねえ。おれはあのお姫様が欲しいんだ」

「イージーク、おまえは馬鹿じゃない。おれはたった一つしか考えちゃいねえが、おまえはこの城とお姫様の両方を考えている。つまらん考えは起こすな。さ、行と行こ。まだ道は遠いんだ」
「おいボジェク、ちょっと待てよ。あのお姫様をおれのものにできるなら、おれは魂を悪魔にくれてやったっていいんだぜ」



「おれはごめんだ」

ボジエクはそう答えて仲間を柵から引きはなした。町の近くの松林へ入ると、ひんやりしている。二人は木陰に入って疲れた体を休めた。ボジエクは横になるとすぐ眠ってしまった。しかし、イージークはあの美しい姫の姿がちらついて、どうしても眠れなかった。と、そのとき緑色の服を着た若い男が通りかかり、イージークが眠っていないのを知ると、近寄ってきた。

「やあ、お若いの、どこへ行くんだい？」イージークに聞いた。

「あっちの国、こっちの国、あてどなくさ。おれはもう、犬のようにほつき歩くのはうんざりだ」
「わかる、わかる。いちばんいいのは、一国一城の主になることだろうな」

「ああ、そのとおりだ。誰もがそう考えるさ」

「そう、場合によっては、ただ意志だけのこともあるぜ」

「意志？ 人間は誰しも、あれもこれも自分の欲望をみんな満たそうとするもんだ。たとえば、おれはあの城のお姫様を欲しいと思う。仲間にも話したんだが、もしあの姫をおれのものにできるなら、悪魔に魂を売り渡したっていいとね」

「本当にそう思っているのか？」

「ああ、本当だ」

「おまえの望みはかなえられるぞ。私はその悪魔だ。おまえが契約書にサインさえしたら、十五

分でおまえは大金持ちのプリンスだ。そしたら例の姫君のところへ行けるぜ。姫君はおまえを好きになり、夫にするだろう。ここに紙とペンがある。ペンで小指を突き刺せ。血判を押すんだ」深く考えもせず、イージークはペンをとると小指を傷つけ、流れる血で紙に署名をしてしまった。

「そう、それでいい。おまえは私のものだ。さて、私は何年後におまえのところへ姿を見せたらいいか？」

「おれは二十年たったらでいいと思う。二十年間美しい姫と愛に生きられたら、おまえと一緒にどこへなと行くよ」

「けっこうだ。さて、ここに金貨のいっぱい入った小袋がある。おまえがどんなに使っても、尽きることもない財布だ。王子にふさわしい服もその中に入っている。着替えたら森の向こうに行ってみろ。数人の召使いが馬を用意しておまえを待っているはずだ。馬に乗って城へ行け。王子が貴族にふさわしい名を名乗るんだ」

「だがよ、おれは王侯貴族のようにはしゃべれやしねえぜ。いっぺんでバレちまう」

「心配することはない。おまえは何でもできるようになるんだ。おまえの仲間が目を覚まさんうちに、早く行け」

悪魔は姿を消した。イージークが小袋をさぐると、立派な衣服が入っていた。着替えをすませ

ると森を抜けた。そこには盛装した召使いたちが、すばらしい馬を従えて待っていた。イージークは優雅に馬にまたがった。まるで、長い間有名な馬丁のところで練習を積んだかのように。馬首をめぐらせて、城へ向かった。召使いたちもイージークのあとに従った。

ボジェクが目を覚ますと、隣にいるはずのイージークの姿がない。多分一人で先に行ったのだうと思い、自分の荷をまとめて先を急ぎはじめた。

ここで、ボジェクがどこへ行ったかはさておき、城へ向かったイージークの運命を追ってみようと思う。

イージークが城へ入ったとき、ういういしい姫はまだ庭にいた。イージークは城主のお目通りを願い、どこそこの国の何とかという王子が数日間この城でもてなしを受けたいと伝えてもらった。

城主はイージークを丁寧に迎え、ただちに部屋を用意を命じた。召使いたちは、悪魔がイージークのためにとのえた多くの荷物をその部屋へ運び入れた。イージークは、姫の気に入るように黄金の服に着替えた。これがままと図にあたった。姫はひと目イージークを見たときから、一途に凛々しい王子が自分のそばにいてくれるように願ったのである。一方、イージークも姫のそばを離れたがらず、糸巻き棒のように姫のまわりを徘徊しながら、水の流れるように姫との会話が進んでいくのに満足していた。数日間城ですごしたイージークは、去る時がきたというよう

なそぶりを見せたが、その実、城主と姫が簡単に同意してしまうのではないかと内心ビクビクしていたのである。

しかし、姫は父王に必死で哀願した。どうかあの方をもっと城へとどめておいてください、と。父は娘の願いをかなえた。イージークは誰にも好かれていることを知り、喜んで城にとどまらことにした。

ある日、イージークは姫と二人きりになった。その時を最大限に利用し、愛をうちあけた。姫もイージークを愛していることを知ると、城主の許へ行った。姫を妻にもらい受けたい希望を述べ、さる国王の末息子なので、引き継ぐべき侯国はないが、いつでもどんなものでも買うだけの金を持っているとつけ加えた。老城主はイージークに祝福を与え、世継ぎにしたのである。間もなく二人の婚礼が行なわれ、イージークは天にものぼるような気持ちだった！

イージークを嫌う人はいなかった。誰にも親切だったし、理由なくして人を傷つけることもなかった。数年たつと老城主も死んで、イージークがその跡を継いだ。

新城主はすでに二人の息子と一人の娘の父親であった。妃との間も円満で、幸せな日々が過ぎていった。ときとして悪魔のことを思い出すこともあったが、そのたびに（まだだいぶ時間はあつた。あとは何が起こるか、誰も知るまい）と思った。

何事もなく月日が去っていき、約束の二十年まであと一年になった。あと一年しかないと思う

と、時のたつのがあまりに早く感じられ、イージークは不安で夜も眠れなくなった。青白い顔で影のように城を歩きまわり、胸のつぶれる思いで子供たちと妻を見ていた。愛を誓い合った妻の瞳に、イージークの姿はどう映しだされていたらうか。妃は何度も何度もイージークに尋ねた。しかし、夫はことばを濁して語らなかった。

そんなふうにして一年が過ぎ、残すところあと一日しかなかった。その日、イージークは終日自分の部屋に閉じこもって、妻に涙を見せまいとしていた。夕方、ドアがひとりでに開くと、緑色の服をまとった若い男が部屋に滑りこんできた。

「やあ、イージーク」蒼ざめた表情の城主に声をかけた。「今日は約束の二十年目の日だぜ。思い出したかい？ 私と一緒に来てもらおう」

「思い出さずにいるか。しかし私にはやらねばならぬことがある。まだ妻に別れの挨拶もしていないのだ。たのむ、あと三日だけ余裕をくれないか」

「いいとも、三日間やってもいい。三日間、毎日一つずつおまえの望むものを選んでみる。私にそれができなかったら、例の契約書も返そう。あとはおまえから何も望まぬ」

イージークは悪魔に心から感謝した。しかし、何となく悪魔をだましたような気がしていた。イージークはみちがえるように元気になって部屋を出ると、妻のところへ行った。妻も陽気にかえった夫を見ると喜び、連れだって散歩に出た。

「そなたは私からまだして欲しいものがあるか？ あったら話してくれぬか」

イージークはそう切りだした。悪魔のために何とか時間のぼしの仕事を見つけてなくてはならないのだ。それを妻から引きだそうとしたのである。

「私はすべて満足しています。ただ一つの望みは、あなたが陽気でいてくれることだけですわ」
「私はもう元気だ。気にせんでいい。しかし、何かしらあるだろう。何でもいいから言ってくれ。城をもっと美しくしてみる気はないかね？」

「前から見ると、このお城はとても美しいのですが、後ろから見ると、あまり美しいとは申せませんわ。あの大きな岩がなかったら、もっと美しくなるでしょうに」

「そなたの言うとおりでな」

イージークはそう答えて、ただちにその仕事を悪魔にやらせるつもりだった。

夕方、城主の前に悪魔が立ち、何かしてもらいたいものがあるかと聞いた。

「城の背後に巨大な岩がある。岩が邪魔して城の美観をひどく損ねている。朝までにその岩をとりのぞいてくれぬか」

「おまえの言うとおりにするさ」悪魔はそう答えて出て行った。

城主は考えた。いくら悪魔でも、あの岩はどうにもできんだろう。そうすれば、まだまだ時間がある。しかし、朝起きると愕然とした。窓から見ると広々とした原野がずっと遠くまで続き、

岩は影も形も見あたらなかったのである。イージークは妻のところへ行き、その景色を見せた。「まあ！ あなたは悪魔とお友達なの？ それとも、あなたは魔法を使うの？」妻は哑然としてその風景を見つめていた。

「私とても驚いているのだ。何が起こったのかさっぱりわからぬ。おそらく、私たちの昨日の話を盗み聞きした悪魔の仕業かもしれない。ま、それはさておき、そなたの望むものを何でも言ってみなさい。それもかなうかもしれない！」

妻は賢い女だった。これは決していい兆^{きざし}ではないことを知っていた。また、夫が何か恐ろしい事実を隠していることも感づいた。夫を見ると、さりげなく言った。私はこの広々とした原野を、それは美しい庭に変えてもらいたい。その庭には、世界の隅々から集めた花、草、木を植えてもらいたい。そして花で庭をうめて欲しい……と。しかし、心の中では（ちょっと待って。もし明日、私の言うとおりになっていたら、まちがいなく夫は悪魔の奴隷にされている。夫はそれを白状しなくてはならない）と思った。

夕方、悪魔がくると、イージークは妻の望みをすべて伝えた。悪魔は約束して出て行った。

次の朝、城主が目覚めたとき、花の香が周囲をつつみこんでいた。見ると、原野は花園に変わっていたのだ！ 美しい楽園がひろがっていた！

眠れなかった妻もやってきて、背すじの寒くなるような恐怖と感嘆の気持ちで遠くまでひろが